

言語文化（古文・漢文）

一
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

七条の南、室町の東一町は、祭主三位輔親が家なり。丹後の天橋立をまねびて、池の中嶋をはるかにさし出だして、小松を長く植ゑなどしたりけり。寝殿の南の廂をば、月の光入れむとてささざりけり。^(注1)

春のはじめ、軒近き梅が枝に、鶯のさだまりて[A]の時ばかり来て鳴きけるを、^①ありがたく思ひて、それを愛するほかのことなかりけり。時の歌詠みどもに、「かかることこそ侍れ」と告げめぐらして、「明日の[B]の時ばかりに渡りて、聞かせ給へ」とふれまはして、伊勢武者の宿直してありけるに、「かかることのあるぞ。人々渡りて聞かむずるに、あなかしこ、鶯打ちなどして、遣るな」といひければ、この男、「なじかは遣はし候はむ」といふ。輔親、「とく夜の明けよかし」と待ち明かして、^⑤いつしか起きて、寝殿の南面をとりしつらひて、営みゐたり。

[B]の時ばかりに、時の歌詠みども集まり来て、「いまや鶯鳴く」とうめきすめきしあひたるに、先々は[A]の時ばかり必ず鳴くが、[C]の刻の下がりまで見えねば、「いかならむ」と思ひて、この男を呼びて、「いかに、鶯のまだ見えぬは。今朝はまだ来ざりつるか」と問へば、「鶯のやつは、先々よりもとく参りて侍りつるを、^⑥帰りげに候ひつるあひだ、召しとどめて」といふ。「召しとどむとは、いかん」と問へば、「取りて参らむ」とて立ちぬ。^f

「心も得ぬことかな」と思ふほどに、木の枝に鶯を結びつけて、持て来たり。おほかたあさましともいふはかりなし。「こは、いかにかくはしたるぞ」と問へば、「昨日の仰せに、鶯遣るなど候ひしかば、いふかひなく逃がし候ひなば、弓箭取る身に心憂くて、^(注2)神頭をはげて、射落として侍り」と申しければ、輔親も居集まれる人々も、あさましと思ひて、この男の顔を見れば、脇かいとりて、いきまへ、ひざまづきたり。祭主、「とく立ちね」といひけり。人々をかしかりけれども、この男の気色におそれて、え笑はず、

一人立ち二人立ちて、みな帰りにけり。

X さむるなどは、言もおろかなり。

(『十訓抄』による)

(注1) ささざりけり||格子戸を下ろさなかった。

(注2) 神頭じんどうを上げて||神頭の矢をつがえて。神頭の矢とは、先を平らにして射当てるものを傷つけないように作られた矢。

問一 二重傍線 a ~ j の語について、用言は活用の種類(動詞は活用の行も)と活用形を、助動詞は意味と活用形を、それぞれ書きなさい。(例)をとこあり||||あり||ラ行変格活用||連用形 けり||過去||終止形

問二 傍線①「ありがたく」②「聞かせ給へ」④「あなかしこ」⑤「いつしか」⑧「心憂くて」の意味をそれぞれ書きなさい。

問三 傍線③「人々渡りて聞かむずるに」⑥「帰りげに候ひつるあひだ」⑦「あさましともいふはかりなし」の解釈として最も適當なものをそれぞれ次の中から選び、その番号を書きなさい。

③「人々渡りて聞かむずるに」

- 1 鶯が飛んで来て、集まった歌詠みたちに鳴き声を聞かせてくれるはずだから
- 2 歌詠みたちがこの家にやって来て、鶯の鳴き声を聞くことになっているから
- 3 従者たちがあちこち探し回って、鳴いている鶯を見つけ出してくるから
- 4 世間の人たちが方々から詰めかけて、鶯の鳴く声を聞きたがるだろうから

⑥「帰りげに候ひつるあひだ」

- 1 飛び去ってしまいそうな様子でございましたので
- 2 飛び去る気配もなくずっととどまっていましたから
- 3 戻ることもせずにじっと待っていましたところに
- 4 戻ろうと思って控えておりましたちょうどそのとき

⑦「あさましともいふはかりなし」

- 1 あきれたとも何とも言えない
- 2 かわいそうとでもいうほかない
- 3 嘆かわしいなどと言ってはられない
- 4 野蛮だというのでは言い足りない

問四 A、Cに入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、その番号を書きなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | A | 辰 | B | 巳 | C | 午 |
| 2 | A | 巳 | B | 辰 | C | 午 |
| 3 | A | 巳 | B | 午 | C | 辰 |
| 4 | A | 午 | B | 辰 | C | 巳 |

問五 Xに入る最も適当な漢字一字を考えて書きなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。

松江^(注1)黄菊^(注2)莊先生、素不遠遊^(注2)。景泰三年、方与^(注2)蔣黄門^(注2)偕至^(注3)姑蘇^(注3)、年已八十^(注3)。邀余^(注3)同弔^(注3)張氏^(注3)故墟^(注3)、謁^(注3)吳泰伯^(注3)・伍行人^(注3)。范文正^(注3)諸祠^(注3)、学宮・書院、歴覽^(注3)迨^(注3)遍^(注3)。每^(注3)至^(注3)則躊躇^(注3)不能^(注3)去^(注3)。默^(注3)有^(注3)題詠^(注3)、但不^(注3)肯示^(注3)人。余苦索^(注3)之、終不^(注3)出^(注3)別後^(注3)、偶^(注3)於^(注3)周廷^(注3)驂^(注3)編修家^(注3)見^(注3)其詩稿^(注3)、從容瀟散^(注3)、皆隱者之言^(注3)、純似^(注3)其為人^(注3)。

前輩^(注3)風致可^(注3)慕^(注3)也。

(王錡『寓圃雜記』による)

(注1) 松江Ⅱ今の上海市の一部。

(注2) 景泰三年Ⅱ一四五二年。

(注3) 姑蘇Ⅱ今の蘇州市。

(注4) 張氏故墟Ⅱ元末に蘇州を支配した張士誠の宮殿の跡。

(注5) 呉泰伯・伍行人・范文正諸祠たいはく 泰伯・伍子胥・范仲淹ごししよ など、いずれも蘇州に縁のある偉人を祀まつった祠ほくら。

(注6) 学宮・書院 〓 当時の教育機関。

(注7) 躊躇ちゆうちゆう 〓 躊躇ちゆうちゆうと同じ。

(注8) 編修 〓 官名。

(注9) 従容瀟散しやうようしやうさん 〓 ゆつたりとしていて清らかなさま。

問一 二重傍線 a 「素」 b 「已」 c 「終」 d 「偶」の読み方をひらがなで書きなさい。(現代仮名遣いでもよい。送り仮名は不要。)

問二 傍線①「遠遊」③「歴覧」⑤「題詠」の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、その番号を書きなさい。

①「遠遊」

- | | | |
|------------|------------|---------------|
| 1 遊びから遠ざかる | 2 遠方まで旅行する | 3 深夜まで遊んで帰らない |
|------------|------------|---------------|

③「歴覧」

- | | | |
|-----------------------------------|------------|------------|
| 1 名所旧跡を廻 <small>めぐ</small> って見物する | 2 歴史書を閲覧する | 3 カレンダーを見る |
|-----------------------------------|------------|------------|

⑤「題詠」

- | | | |
|--------------------|----------------|----------------------|
| 1 名所に掲げられている詩を吟詠する | 2 議論に際し主題を提示する | 3 特定のテーマやものについての詩を詠む |
|--------------------|----------------|----------------------|

問三 傍線②「方与^二蔣黃門^一偕至^二姑蘇^一」の読み方として最も適当なものを次の中から選び、その番号を書きなさい。

- 1 かたがたしやうくわうもんにあたへてともにこそにいたれば
- 2 すべからくしやうくわうもんとともにこそにいたるべきに
- 3 はじめてしやうくわうもんとともにこそにいたるに
- 4 ただしくしやうくわうもんをあたへともにこそにいたらば

問四 傍線④「毎^レ至^レ則^レ躊躇^レ不^レ能^レ去^レ」の解釈として最も適当なものを次の中から選び、その番号を書きなさい。

- 1 毎日名所旧跡に来るばかりなので退屈であったが帰ることができないので
- 2 名所旧跡に行くたびごとに懐古の情が高まってなかなか立ち去れなくなるので
- 3 名所旧跡に行くたびごとに建物を撤去しようと思うがなかなか決心がつかないので
- 4 名所旧跡に行くたびごとに道に迷って帰れなくなるので

問五 傍線⑥「但不^レ肯^レ示^レ人^一」の解釈として最も適当なものを次の中から選び、その番号を書きなさい。

- 1 ただでは他人に見せようとはせず
- 2 ただし、他人が作ったものに並べることを承知しなかった
- 3 ただ、謙遜して他人に見せようとはしなかった
- 4 ただ、他人の評価を気にしなかった

問六 傍線⑦「前輩風致可_レ慕也」の説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号を書きなさい。

- 1 黄菊荘が、蘇州で出会った作者たちの人柄を後になっても慕わしく感じている。
- 2 作者が、先達である黄菊荘の奥ゆかしい人柄とその詩風を慕わしく感じている。
- 3 黄菊荘が、蘇州の名所旧跡を慕わしく感じている。
- 4 作者が、蘇州の名所旧跡を慕わしく感じている。